



図-2 東お多福山草原保全・再生研究会の構成団体とロゴ



写真-3 幼稚園児も遠足で来られるアクセスの良さ



写真-4 第2眺望点からは瀬戸内海と阪神間の街並みを一望できる

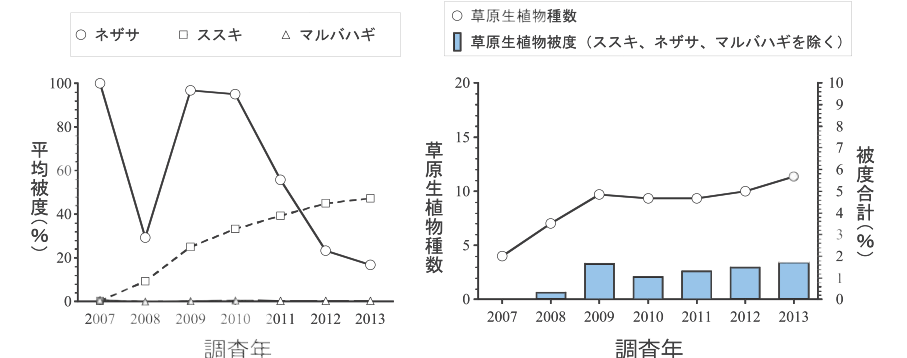


図-3 モニタリング区におけるネザサ、ススキ、マルバハギの被度の変化（左図）および草原生植物の種数・被度合計の変化（右図）

物多様性保全プロジェクト」に位置づけていただいているほか、兵庫県神戸県民センターからは普及啓発活動を共催するなどの支援を受けています。神戸市森林整備事務所は草原内を通るハイキング道両脇のネザサの定期的刈りに協力くださっています。

6.東お多福山の魅力を引き出すために

東お多福山草原の魅力と問われれば、①都心からのアクセスの良さ、②瀬戸内海・港町を一望できる眺望、③生物多様性の3つを真っ先に挙げます。

アクセスについては、都市域に隣接することから公共交通機関を乗り継いで約1時間で草原の入り口にまでたどり着けるという利便性が魅力です。幼稚園児も遠足に訪れることのできる道のりであり（写真-3）、秋の行楽日和になると多数のハイカーが訪れます。数ある六甲山ハイキング道の中でも歩きやすく、草原景観も楽しめることから、かつては最も人気のあるコースとして多くのガイドブックで紹介されていました。

眺望については、山頂から一段降りた第2眺望点から瀬戸内海を一望することが出来（写真-4）、空

気の澄んだ冬場には関西空港や紀伊半島まで見渡せる絶景を楽しめます。かつては山頂三角点からこの眺めを楽しむことができましたが、現在は残念ながらヒノキ植林に阻まれ眺めることができません。

生物多様性については、普通種から希少種まで、都市域ではみられない草原生植物を多種類観察でき、草原環境について学べることや草原景観を楽しめることが魅力的です。本研究会は、このような草原の魅力を活かし、東お多福山を、①草原生の生き物が豊かな環境、②子どもから大人まで自然にふれあう憩いや環境学習の場、③阪神地域の文化財茅葺き民家への茅の供給地、として保全し、次世代に受け継ぐことを目標に活動しています。

7.東お多福山草原を未来につなげるために

まず、ススキ草原を維持するために年1回の刈り取りを行っています。研究会では現在8000㎡の面積を管理していますが、労力の関係上、一度にすべてを刈り取ることが出来ないため、年4回に分けて刈り取っています。特に晩秋と早春の活動の際には大面積の刈り取りを実施し、60名以上が集まります。

次に、管理活動の草原生植物の多様性やススキの被度の回復に対する効果を検証するために、定置調査区を設定し、毎年春、夏、秋の3回の植生モニタリングを行っています。2007年から2010年の3年間の調査の結果、毎秋1回の刈り取りでも種の多様性は回復するがその速度は緩やかであること、早期にススキの優占する草原に復元するには夏にもネザサを選択的に刈る必要があることがわかってきました。しかし、8000㎡全てで夏にネザサだけを選んで刈ることは労力的に困難なことから、研究会では草原生植物が集中的に生育している場所に限って夏のネザサの選択的刈り取りを実施し、草原生植物の種子供給源を形成する事をめざしています。

刈り取りは6年間行ってきましたが、単位面積（5㎡）あたりの種数の増加は頭打ちとなりつつあります（図-3 右図）。これは草原面積が大幅に縮小したこととネザサが優占する期間が長く続いていることで、草原全体で植物の種類数が減ったり、残っている種であっても生育密度が極度に低下したりしている事が原因で、刈り取りによって良好な環境になった場所への種子供給が極端に少ないために生じている現象と考えられます。草原全体

での植物の多様性を高めるためには、東お多福山から採集した種子から育てた草原生植物の苗を移植するなどの積極的な手法を用いて、草原生植物の集中する植分を複数確保していく必要があります。

草原管理の継続性を担保するには、ひとりでも多くの方に東お多福山の魅力を伝え、社会的支持が得られるような環境を整える事が大切と考えています。そこで研究会では、東お多福山草原に関するフォーラムや観察会の開催、環境学習教材の作成（兵庫県神戸県民センターとの協働）などを通じて本草原の重要性をアピールする活動に取り組んでいます。2013年度からは兵庫県神戸県民センターとの共催により東お多福山草原生物多様性ガイド養成講座（4回連続）を開催し、本草原の魅力を伝える仲間づくりにも力を入れています。

また東お多福山のかつての姿を明らかにするために、本草原で撮影された古写真を収集する研究を進めています。一般の方から提供された写真や古いガイドブックに掲載された写真、行政内部に資料として残されている写真などを収集、2014年9月現在で約430点が集まっています。古写真からは当時の草原景観や優占種の様子だけでなく、当

時の人々の草原の利用様式や眺望などが読み取れます。また撮影地点がわかる古写真については、同一地点から撮影した現在の写真と比較することで、植生や景観の劇的な変化を示す有力な資料となります。今後は古写真展などを開催し、東お多福山草原のかつての姿を再生する目標像を共有していきたいと考えています。

このように順調に活動が発展している東お多福山での草原保全活動ですが、いくつか課題が残っています。

1つ目は若い世代の参画の促進です。これまで、刈り取り活動は、ハイカーの安全性を確保するために平日に実施してきました。そのため仕事を持つ20代後半から50代の現役世代が活動に参加しにくい状況が続いています。これについては、ハイカーが比較的少ない12月から2月の冬季の週末に刈り取りを実施したり、刈り払い機による刈り取りは平日に、集積作業は週末にというような作業の切り分けをしたりして現役世代が参加できる日程を確保したいと考えています。また企業のボランティアの積極的受け入れたり、大学の環境サークルなどへ働きかけたりしたいと考えています。

2つ目は管理面積の拡大です。現在の草原面積は約9.2haで、うち管

理が出来ているのは約1割です。特に芦屋市域に位置する特別保護地区内では、わずか100㎡しか刈り取り管理が出来ていません。現在、特別保護地区内のハイキング道がネザサに覆われ通りづらい状況にあることから、今後はハイキング道両脇のネザサの刈り取りを行い、ハイキング道と草原生植物の多様性の保全の両方を実現させたいと考えています。

3つ目は文化財への茅供給の実現です。6年間の活動によってススキが優占する植分も少しずつ増えてきましたが、屋根を葺くのに十分な茅を供給できるほどには至っていません。阪神間の文化財の茅葺き屋根の葺き替えの全てを賄えなくとも、一部を賄えるよう、まずは毎年少しずつ茅を刈り貯める取り組みを実現させたいと考えています。将来的には東お多福山草原から出荷した茅で得られた収入が保全活動の資金となる事が理想です。

このように、まだまだ課題の多い東お多福山草原の保全活動ですが、一つずつ克服していきますので、皆様には温かいご支援をお願いいたします。

「草原生」について筆者からコメントを頂いています。18ページも参照ください。